

青山家住宅

6軒の郷宿の一つ、田儀屋は現在の青山家住宅となっている家で担われていました。1800年代半ばに建てられ、2階建ての家と蔵はどちらもオリジナルの外見を保っています。白い漆喰の壁と灰色の屋根瓦があり、木造のシンプルなディテールは一見の価値があります。江戸（現在の東京）幕府が石見銀山を直接管理に置いて行政官に監督させていた江戸時代（1603～1867年）、郷宿は社会の一部でした。行政官は、鉱山そのものだけでなく、150ほどの村々を含むその周辺の土地も管理していました。こうした村々の住民は、奉行所で公務を行うために大森の町へ出かける必要がありました。このため1700年代の半ばには郷宿のシステムが確立し、このシステムの下で村々は6つのグループに分けられました。各グループが一つの郷宿を割り当てられ、村々からやってきた人々が大森に滞在中はそこに宿泊しなければなりませんでした。奉行が大森の豪商の一族らにこの業務を請け負わせ、この郷宿は代官所から出された法令等を各村々に伝達する役目も負いました。青山家は現在も個人が所有する住宅ですが、一般公開を行うこともあります。